

題 目 状況プライミング法による関係流動性操作の試み

氏 名 渡部勇太

指導教官 結城雅樹

本研究の目的は、2種類の課題を用いた状況プライミング法による関係流動性認知の操作手法について検討し、それと同時に、先行研究の知見が関係流動性操作によって再現されるかを検証することである。これまで数多くの心理・行動傾向の文化差や社会差が、社会生態学的要因である関係流動性によって説明されてきた。しかし、それらの研究の多くは、実際に関係流動性が異なると考えられる文化間や社会間、地域間の比較によって検証されており、因果関係の特定にまで至っていない研究も少なくない。よって今後は関係流動性を実験的に操作し、心理・行動傾向との因果関係の検証を行う必要がある。そこで本研究では、Yuki et al. (2013, Study 3) と同様の課題を用いて状況プライミング法による関係流動性認知の操作手法の追試を行った。また、新たに作成した関係流動性認知の操作手法についても検討を行った。それに加えて本研究では、先行研究において関係流動性との関連が示されてきた、自尊心と主観的幸福感の関連 (Yuki et al., 2013, Study 3)、社会不安の水準 (Sato et al., 2014)、自尊心の水準 (Sato et al., 2007)、一般的信頼の水準 (Yuki et al., 2007) の4つの心理傾向についても検討を行った。すなわち、プライミングにより関係流動性認知を操作して、先行研究の知見や予測と一貫した結果が示されるかを検討した。その結果、2種類のプライミング操作課題の両方で関係流動性は低関係流動性条件よりも高関係流動性条件の方が高くなっており、操作の成功が確認された。これらは、今後の関係流動性に関する実験研究を後押しする意義深い結果である。また、自尊心と主観的幸福感の関連は先行研究と一貫した結果が得られ、Yuki et al. (2013, Study 3) の知見の頑健性が確認された。さらに、社会不安では自己志向的社会不安に予測と一貫した結果が一部見られた。これは Sato et al. (2014) では検討されていなかった新たな知見であり、今後その関連について詳細に検討する必要がある。しかし一方で、他者志向的社会不安、自尊心および一般的信頼の水準については先行研究と一貫した結果は得られなかった。これは本研究の課題と今後のさらなる検証の必要性を示唆する結果である。2種類の課題を用いて関係流動性認知を操作し、4つの知見の再現性を検証した本研究の資料的価値はきわめて高い。本研究で得られた知見が、今後のさらなる検証の一助になることを願う。